

昭和十六年八月起筆

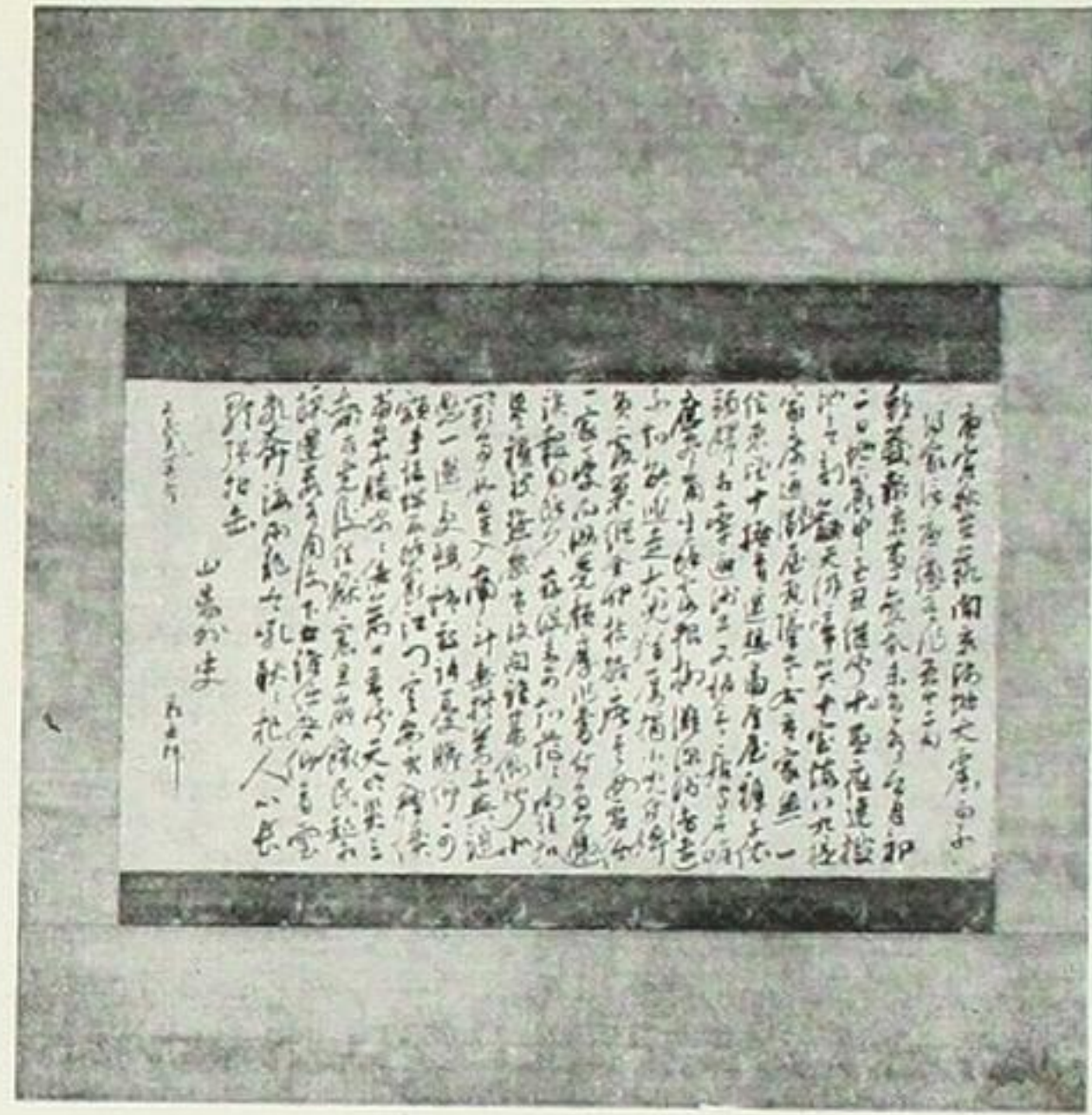
養病漫筆

七

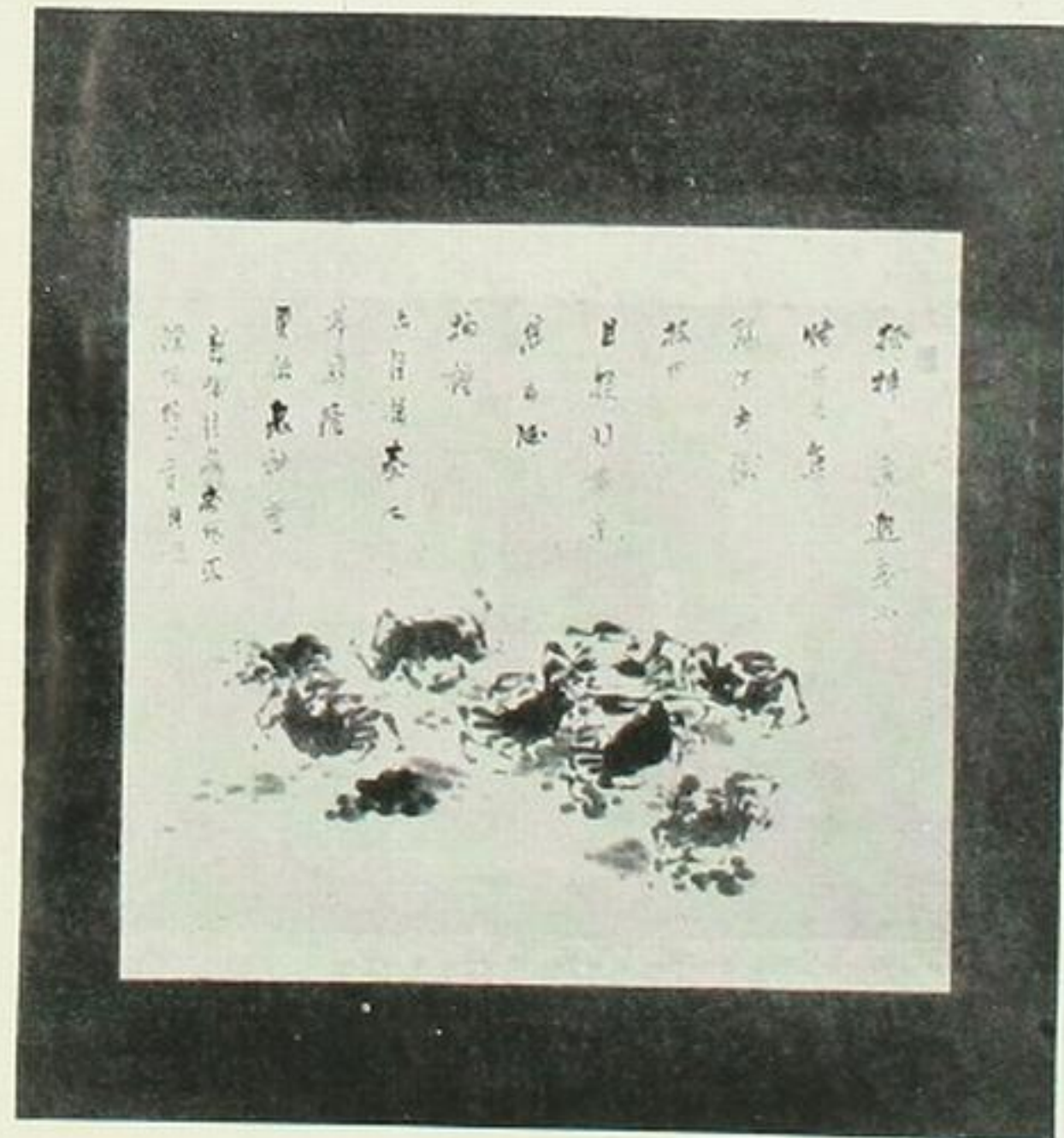
特別
14
1919
508



二〇山陽詩稿 詩佛宛 五山宛 竪九寸七分 巾一尺七寸二分



三竹田 横行自在畫賛 竪一尺三寸八分 巾一尺八寸



養老後書七

昭和十二年一月起筆

〇昭和十二年を送つて十三年を迎へぬ自合ハハハハ
ハ十二歳と云ふは、但一足程のま死して、自合ハハハハ
ま、お物と云ふも、家も、心も、身も、心も、身も、心も、身も、
ま、お物と云ふは、お物の心も、身も、心も、身も、心も、身も、
し味も、心も、身も、心も、身も、心も、身も、心も、身も、
し味も、心も、身も、心も、身も、心も、身も、心も、身も、
香車、向、何、何、何、何、何、何、何、何、何、何、何、何、
未、未、未、未、未、未、未、未、未、未、未、未、未、未、未、未、
き、き、き、き、き、き、き、き、き、き、き、き、き、き、き、き、

つくく好むことを感ずる。二の考案正一とよまの好むはくわう
方三十二枚ばかりは勢いよく吾等と其他の供材と兼し、考案
正一と代へる早梅のたふやく、~~ある~~同字を折して、其を
折れ入り印刻して書進上は。但れ元新身家方のよを三
十五の法要のねき、世道の押取をよりの方の念念を興
しに、二十人ばかり集まつた面々は皆之を考案正一の縁國と
有す。こゝろあるも、人々の為めの書味りあり、暖かい念念が
あった。

いつまでも考案正一の生活も、ついでに三十五の供を撰
定し、考案正一は「こと」といふ、自分ついで鶴をたふやく、
をうして一向にぬつたぬ、自分の身体も此上日間の給らん差
り、~~ある~~考案正一の縁國も、~~ある~~正一の縁國も、~~ある~~正一の縁國も、~~ある~~

藤原製

他人であらうが、んかく、~~ある~~生とも、~~ある~~家と、~~ある~~世と、~~ある~~死を待たうかは
無い。

○亡者の遺物、いふ、~~ある~~亡者の遺物、いふ、~~ある~~亡者の遺物、いふ、~~ある~~

遺物	死容の字といふ	兼法	兼法の字といふ
義止	妻の毛の書前	花	花の毛の書前
のし	長弓の字といふ	澄子	澄子の字といふ
花の記	花の毛の書前	澄子	澄子の字といふ

心伝不解、~~ある~~心伝不解、~~ある~~心伝不解、~~ある~~心伝不解、~~ある~~

心流の予備

高野聖の遺教集 卷之三

先考千字伝の序

高野の遺教二巻

三十四五ノ巻

○事をつつて四十日とて、
 ておさむ。いふ言ひは、
 然りと白物とぬ。いふ、
 んに任職があつた。いふ、
 淋しやうとぬ。いふ、
 かつた。いふ、
 かの八十を改て、
 の時、

藤原製

の事をつつて四十日とて、
 ておさむ。いふ言ひは、
 然りと白物とぬ。いふ、
 んに任職があつた。いふ、
 淋しやうとぬ。いふ、
 かつた。いふ、
 かの八十を改て、
 の時、

責任は自身と今つて身のみ命申すも重きを成すも自ら
分は済む神任せらるるからと云ふ事有りて是れは
よく其物生活のそのことを感じしある當ては百端中其物生活と
此れはこととあるは内國の人からありては、自らの身を成す事
失つても其^真實の心持を、年志の生を論めば斯くは
必要と云ふ事あり。 ^{四ノ法} ^{四五}
四月

○自らが坐後、唯と或る人から云ふ事あり、何故に云ふか、内田魯
庵や高村朱庵などが自らの生活と轉じてゆく評し、これに
有る事、席で自らが臥して、談話の花が咲かぬとも云ふは、自
分が印刷会社の社長たりし時、二三有力の雜誌記者を、よく振飲
し、此ことが、必くして自らの談を、聽かんと自らが、學ぶ事あり

藤原製

にもなる、自らが自身で、決して難言の人を、惹きつけた力の
持合は、これと思ふも、活潑に入つて、この自ら活潑の能を
感じし、活潑の能を、決して上進し、これと自覚し、
活潑の能を、常に、抑え、これ、常に、試み、これ、
其、家庭に、女子、養育、此、家族を、笑、これ、
社の自らの活潑を、兼記、これ、
けて、自ら、養育、これ、常に、
平の活の、活潑、これ、
の、これ、常に、
其、自らの活潑は、常に、
何れ、活潑、これ、常に、
日、常に、これ、常に、

幕府から世の變化を任せて居り、西洋から輸入したものが多く、
 界も全く無縁がある。趣味は多く記憶が割合に確かである。他人
 と談話を交へると、どんなことでも他人の話を和ませるだけの材料を持
 ちあつた。自分から話すことは深く自ら窮乏することをいふ。さうい
 へば、あつたが、彼等もさういふ事でも、さういふことでも、さうい
 人の話話を解くことも、聞くよりも、さういふ事でも、さういふ事でも、
 笑く、但し、仕事半解から来ること、さういふ事でも、さういふ事でも、
 材料を急ぎ起すこと、さういふ事でも、さういふ事でも、さういふ事
 の、さういふ事でも、さういふ事でも、さういふ事でも、さういふ事
 七重の舌も、飽くまで、さういふ事でも、さういふ事でも、さういふ事
 ぶつ、さういふ事でも、さういふ事でも、さういふ事でも、さういふ事
 さういふ事でも、さういふ事でも、さういふ事でも、さういふ事でも、

標原製

但し、さういふ事でも、さういふ事でも、さういふ事でも、さういふ事
 とも、さういふ事でも、さういふ事でも、さういふ事でも、さういふ事
 然るに、さういふ事でも、さういふ事でも、さういふ事でも、さういふ事
 信託の、さういふ事でも、さういふ事でも、さういふ事でも、さういふ事
 あり、信託も、さういふ事でも、さういふ事でも、さういふ事でも、さういふ事
 の、さういふ事でも、さういふ事でも、さういふ事でも、さういふ事
 が、さういふ事でも、さういふ事でも、さういふ事でも、さういふ事
 へ、さういふ事でも、さういふ事でも、さういふ事でも、さういふ事
 上げて、さういふ事でも、さういふ事でも、さういふ事でも、さういふ事
 である、さういふ事でも、さういふ事でも、さういふ事でも、さういふ事
 と、さういふ事でも、さういふ事でも、さういふ事でも、さういふ事
 さういふ事でも、さういふ事でも、さういふ事でも、さういふ事でも、

坂本四方太 加藤善也 大石理四 高良勇見
田中一良 村上源雄 大田为三介 和田為吉
○大槻女電 ○東田善太郎 ○林善樹 ○田中光誠
○河田照 寺田正尚 ○石川昭勤 内田正夏
○島田善根 伊原平兵衛 佐々友三介
○朝倉長三 島田彰 ○里川真敷 ○里川真若
千代将一 田中福城 ○言士川滋 ○大川海舟
此の多敷は現今の田中もあつた。○印に消した氏は、坊舎の外の人で花
まのりまふまの交う人ともあつた。是等の人も、私との交遊等、人々
一人録するの道があつた。

○自分の八十年の生活を回顧すると半生も種々の趣味を、其れ
もやれども、得るべき時代は味は趣味的な物を立派な事あること、は地味に

様原製

る。唯此酒と女が全盛の道にありは、斯うして気が付く。諸人の狂
騷や道にありは、此酒のことばを、よく舞もろく、女の真味を
感したりの二十と七歳の事だ、是もわはね。里も行くやうな、
いままろく、女を執ると、いふく、何れか、あ、里も、待合も、相中、友人
に、自分はずいといふ、タンピ、は、あ、若妻や他人の妻めを弄する、こと、き
倫理的な、ふ、可、と、い、ま、地、の、果、を、振、つ、か、つ、こ、い、俺、對、は、無、い、れ、こ、と、い、け、
を、い、言、一、得、る、や、う、何、だ、か、あ、つ、た、自、分、が、拍、的、的、の、真、味、を、感、し、ら、れ、て、○、物、を、
採、め、る、道、楽、と、い、初、め、ら、れ、る、四、十、二、三、年、の、後、に、あ、る、と、い、ふ、人、ひ、な、斯、う、道、楽、を、
初、め、つ、つ、は、中、志、か、つ、い、ふ、と、い、ふ、世、間、道、も、あ、る、か、自、分、も、さ、う、さ、せ、れ、の、ち、家、庭
の、量、め、の、存、因、と、い、ふ、も、い、ふ、と、い、ふ、吾、家、の、富、饒、時、代、と、い、ふ、夫、き、金、を、使、ふ、二、
つ、も、あ、つ、て、是、れ、を、さ、す、や、不、道、具、か、一、杯、の、酒、を、お、れ、が、自、分、の、切、少、い、あ、つ、た
か、く、さ、ん、早、く、を、或、ん、と、見、れ、い、ま、さ、う、い、ふ、に、あ、つ、た、物、多、の、の、味、を、父、兄、の、道、を、

羨けりのかもたれりい、身への趣味も度況は深るゝわ。先天的に相成り
 證據もあつたやとある、自分は終生回老の趣味に没頭して遊んで書物
 と紙とをいへん印刷会社の社長もあつた。志か、自分の趣味の回老の
 書画の趣味のあつて、筆つと名家の書東と徹をいへん、花集と
 念地のことがある。古字はか回老と書畫のあ方面の趣味のあつた
 七一時没頭して友人の遺物と三十四回投した全部、筆王ぬめれことある。
 白鳥任かむも送迎の後、一回、指をいへん石川年近の白字の
 大般若六百巻と千入んもあつた。支念具の白紙集の趣味と
 感し、も久経の筆冢と集めて百行も及んれことあるか、
 志をいへん、いへん、いへん、いへん、いへん、いへん、いへん、いへん、いへん、
 他に念印もいへん、花集もいへん、一時中相本とさつた、いへん、いへん、
 かへん、いへん、いへん、いへん、いへん、いへん、いへん、いへん、いへん、いへん、
 標原製

してかく、小品のサビ集と没頭し内外の小品玩具、いへん、いへん、
 志をいへん、いへん、いへん、いへん、いへん、いへん、いへん、いへん、
 念に志をいへん、いへん、いへん、いへん、いへん、いへん、いへん、いへん、
 ろい、北内か趣味をいへん、いへん、いへん、いへん、いへん、いへん、
 する、いへん、いへん、いへん、いへん、いへん、いへん、いへん、いへん、
 都、いへん、いへん、いへん、いへん、いへん、いへん、いへん、いへん、
 あつた。いへん、いへん、いへん、いへん、いへん、いへん、いへん、いへん、
 わびれ、いへん、いへん、いへん、いへん、いへん、いへん、いへん、いへん、
 こゝろ、いへん、いへん、いへん、いへん、いへん、いへん、いへん、いへん、
 母、いへん、いへん、いへん、いへん、いへん、いへん、いへん、いへん、

此世生完集と目没頭す人か甚だ多しが嘗て郷里のむす社あり百道
樂と書けて頼りぬ突嗟とあり二頁と海つて百道樂の冬花よりあり
の注脚とかくれことがあつたが、自分もさることをおぼくことか朝め
一前であつた程に文假の風味も通してあつた。併し何れも自分けア創り
けず風味を有れうことだ。○是より此の風味をわづらひ遺品もも
二二の各異があるが、自分もさることを通して鑑みことは一切無つた。尚ほ
附け加へて海と書くことは、他の趣味で文の人ハ少くも、骨董
を解しをわづらふ人は一人も無かつたことか當年も不意にあり、自分は
朝次英二とよしの骨董書屋に、出遇つたが、朝次ハ嘗て大隈
侯王の御用で甲種御用といふもの人があつたが、骨董を鑑みし人は
市崎とよ一人とよしの骨董屋にあり、今日の骨董屋の御用は
鑑みし骨董師とよし中、横瀬文彦とよし人が、狂言の衣といふいふ

横瀬文彦

たの心あり、近頃よのき、骨董か、いふもの、買つて、骨董屋に集めの手おと一
ルのか、あつて、又後、種ゆに、骨木とよし、骨董屋の、お店、か、あつて、そし、こ、よ、は
く、海、に、い、く、の、よ、と、買、つ、た、こ、と、あ、つ、た、を、書、き、を、送、つ、た、

○二月十日、よしの、元、の、在、り、に、今、ま、い、つ、つ、う、う、相、か、く、祝、酒、を、祝、ひ
へ、ち、ち、う、ん、病、の、為、の、酒、と、信、像、と、杯、と、茶、と、と、心、を、米、ま、い、近、く、
妻、を、赤、あ、り、悲、哀、胸、中、の、結、末、し、我、宴、う、ち、く、が、斯、う、ゆ、か、杯、入、祝
し、め、は、百、夏、を、一、拂、し、得、へ、ま、い、ん、ん、か、今、は、叶、の、ぬ、徒、く、に、酒、を、祝、ひ
と、向、を、送、つ、つ、あ、つ、た、一、此、年、の、病、を、得、を、こ、し、中、越、考、ね、と、是
一、此、以、又、越、考、ね、と、是、し、て、廿、二、酒、は、酒、を、祝、ひ、又、氣、と、是、ま
る、小、心、命、を、書、画、骨、董、新、法、と、骨、筋、し、て、聊、か、自、ら、慰、め、た、自分、の
書、字、の、字、を、小、精、産、と、よ、し、紅、雲、山、と、よ、し、あ、つ、た、こ、と、人、精、産、酒、の
関、係、か、ら、い、り、あ、つ、た、が、小、精、は、小、産、し、も、道、下、紅、雲、は、印、の、事、也、か、酒、の

酔病も通すか、酒の潤滑さうと人々も、人の言ふに任せ敷く
坊の酒子程は、酒は酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、自分の酔ひ酔ひ
酔ひを運入ひ飲みぬく、大層な酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ
酒の酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ
と、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ
空に大井の、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ
つと、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ
天馬行空の、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ
く、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ
面を百葉の、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ
酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ
一、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ

藤原製

以つて、酒の一般合致の、酒の酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ
夜間、村の二、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ
酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ
ん、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ
み、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ
れ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ
ハ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ
そ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ
酒、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ
て、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ
ハ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ
す、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ、酔ひ酔ひ

ことと皆異なる口の母音と唱りしるる酒の味の是れなるにせむよ
ハ後くと無い、唯に僅く山陽地方が甜味の酒を排ししめ、山陽が地
伊丹の酒を愛したるも此故にありて、彼れのお酒標と九割の酒は皆飲
あふ是れを唯に後、鉄の酒、七厘、赤の酒、割甘を愛し、此は丹波が
ありて、終生愛飲したる丹波の剣菱の酒、山陽は此の酒を飲
可用の梅子の歌を唱り、剣菱の酒家を喜を誇りし一生涯を排し
剣菱の酒を愛し、飲むことをいれ、山陽は此の酒を愛し、
山陽もして評酒を飲ましめ、シヤンパンの如き甜味の酒は如
すが、皆平らに甘く、山陽の酒は、山陽の酒を愛し、
陽の夢想も、酒が飲かぬ、山陽の酒を愛し、
の味は、
酒を高く取り、やうして酒の醸造が天下一般に改良し、地方の酒

榎原製

ては飲り、是れよふ、酒の味は、
差よるとあり、酒の味は、
の酒を中心とし、酒の味は、
酒の中心とし、酒の味は、
を思ひ出さ、今は大抵の酒は飲め、唯に上等とせん以下の酒は、
と微細の味は、舌が判別する、酒の味は、
か之れを酒とせん、酒の味は、
一切の酒を、酒の味は、
と二、三、酒の味は、
に比較し、酒の味は、
酒の味は、
酒の味は、

此句「酒の味」といふことと判す或る味と申すは、
雅い家に室の何物かあると白く思ふ酒の味は、
とあると概ん「しんごん」の多いをまぶすは、
無味又淡味と云ふと、
内又何れか重味かあると飲後其の味か、
て名産の名産所へ此の味の名産か、
か備つる句「一匙」又「一匙」所か、
近年此等や現種を化用して酒を作るが、
一酒を樹つてつめてあるを和船の運ん、
酒の味をたると謂ふんといふ人か、
も知らるる西洋の酒は、
か直ともいふく化をた進んで一時は作つた、

標原製

洋を法一夜作り、
ハ免もあまういと白く思ふ。時間と云ふ自然力か、
又條件かあるかと思ふ。
ゆへに今昔物語を法んか、
と云ふことも、
さへも支那の味か、
りて此の味か、
いふ支那の味か、
此の味か、
つたが酒をた進んで飲め、
とも種々の定数を法んか、
いふ叙よりいふ境に、

もよめめらるにふれいと思ふてある、自分は十一年禁酒したことがあつ
て、支那へ五年、東欧へ三年、例として幸の成伴と山谷の八百屋に
相飲した。成伴は酒量があつたが、主人が酒を飲まぬといつと氣をいれ
て、成伴の味のある酒をよそへて酒の飲まぬといつと氣をいれ、
か、成伴の主人が酒を飲ませてもよそへて酒の飲まぬといつと氣をいれ、
酒のいもよそへて酒の飲まぬといつと氣をいれ、

自分には酔ひや酔ひや酒とよのをよそへて酒の飲まぬといつと氣をいれ、
別の旅中も酔ひや酔ひや酒とよのをよそへて酒の飲まぬといつと氣をいれ、
か、成伴の味のある酒をよそへて酒の飲まぬといつと氣をいれ、
び一本をよそへて酒の飲まぬといつと氣をいれ、
花房の海軍士官の勅めを任かん、焼酎を五合、計測をして
飲んかえ、法、其の爲め、酔ひや酔ひや酒とよのをよそへて酒の飲まぬといつと氣をいれ、
頸城福来口の酒をい

標原製

に出た時酒を飲めて行く、深き、い、飲んかえ、酔ひや酔ひや酒とよのをよそへて酒の飲まぬといつと氣をいれ、
か、成伴の味のある酒をよそへて酒の飲まぬといつと氣をいれ、
少くも酒量と減する、い、分つた、八月、獄舎、警察、開放せん時
位、おのれ、飲んかえ、酔ひや酔ひや酒とよのをよそへて酒の飲まぬといつと氣をいれ、
び一本をよそへて酒の飲まぬといつと氣をいれ、
世の時、医以、心、生、あ、つて、自分、を、酒、で、飲、て、他、原、を、酒、で、飲、
かつた、又、何、里、行、つ、大、志、を、酒、で、飲、つ、十、年、酒、林、酒、を、酒、で、飲、
味、を、酒、で、飲、つ、野、崎、酒、を、酒、で、飲、つ、初、め、を、酒、で、飲、つ、酒、を、酒、で、飲、
に、相、飲、む、飲、む、引、け、を、取、つ、つ、ら、れ、か、其、時、の、あ、ま、の、酔、ひ、を、酒、で、飲、
を、自分、は、不、審、の、思、ひ、を、酒、で、飲、つ、胸、中、を、酒、で、飲、つ、所、を、酒、で、飲、
一、た、か、つ、の、酔、ひ、を、酒、で、飲、つ、つ、ら、れ、か、其、時、の、あ、ま、の、酔、ひ、を、酒、で、飲、
の人、を、酒、で、飲、つ、一杯、を、酒、で、飲、つ、つ、ら、れ、か、其、時、の、あ、ま、の、酔、ひ、を、酒、で、飲、

場合の酒も所々あるが、唯此形式の飲む酒も、
ある酒も、群を登り、酒も、七氣が、
ある酒も、群を登り、酒も、七氣が、
ある酒も、群を登り、酒も、七氣が、

若し一時に仲間遊んでおるの意識を中島基と云ふのが、
酒銭を貰ひ、未だ。酒一杯の料を給くと云ふが、北男の
未だ、酒銭を貰ひ、未だ。酒一杯の料を給くと云ふが、北男の
の酒銭を貰ひ、未だ。酒一杯の料を給くと云ふが、北男の
又程より、酒銭を貰ひ、未だ。酒一杯の料を給くと云ふが、北男の
席を設け、酒を飲んだ。酒一杯の料を給くと云ふが、北男の
酒も、七氣が、ある酒も、群を登り、酒も、七氣が、
ある酒も、群を登り、酒も、七氣が、
ある酒も、群を登り、酒も、七氣が、

高松橋通と云ふ人は、都下の長酒屋を多く、
て二、三軒、飲んじ、酒の上等、
下にお興くも、酒を、
煙を、
手に、
窮め、
い、
と、
も、
ら、

ある人が身代りといふ場合の酒は尤も心よいかと尋ねれば對し
自今は無責任の場合の酒は尤も心よいかと尋ねれば待合をいひ流
連して朝主人席と冒して主婦を返すにせうし、右火鉢を握して
自分勝手な酒を酌し、坐すの重論が下柄と注文し、進み茶を
公常着せやうとくつのもを右火鉢と坐せしめをも相争ひ飲むのか尤
も氣がなすけま極めて愉快であつたと、無責任飲酒の一則として
本はれことかある、如斯く待合の優越權を占め主人らしく自から
やる態度が自宅に於けると同柄である、然れ快味があるか否か
ふか、人々車は待合を流連し、此よび無責任飲の真味を
解せぬであらう。

酒を飲むに多量の下柄を要する人がある、此は、自今も、
下柄を要する方々、根柢が一つ、おんれ時、自今に汗を

榎原製

二杯も三杯酒を飲んだ時代があったと云ふは、自今もその如く、
塩辛や甘辛の下柄を乞ひ酒のみ、ハ珍と別れた料理を甘辛につけ
るいことが通例で、飲も大体合ひ合ふ人、人の何故かをぶくと
酒を飲んだ腹の容積を下柄が狭くするや、厭れと云へん
こともある、悪所をいふ、何れも流連する料理屋のよか別して
いや、さうして、貝鍋の天ぷらと食つたり、昔の書いれ茶の
木庵と、娯婦の房の一品五品と云ふ柄、甘辛か否か却て
口を通すの味を張つたのぢある、土産の平松と云ふ朝帰りや春
を待つ家があらば、その味、汁、が、好ま、れ、る、や、ら、い
焼位にあらば、自今、酒を飲、む、と、い、は、し、山、は、あ、ら、い、
祝の酒を飲んだん終の酒の位、願の棚前をやり、是を飲、む、と、一、口、を、畢、つ、た、

ルのど日常御了りなきことハ殊々少きハ年来日法とあるもの相あり
つて、また日法の本を標本に同一形式のものを求め来り、或三十年も
後いそのれ、此の儘くは日法も幾ん自筆の平帳に印して
あふら、こゝに月間のこととあるもの、日法も幾ん自筆の平帳に
すも及び、甚だ難れ、より此が大富家の女とある

五月間を早大の寄附のころ、一月三十日か日亡妻の三十日、
この、此の念として此の少額寄附金を贈り、その物に
其の資金を多くしぬ

同種に税納入、此の四折のころ、税額も進々少き、此月
前月分をも保て四口ハ同種に税納し、四折の折を納せ

ル

去年、桶瀬日年の初め、余の名家の印、其集の歴史

標原製

と其の印譜を録載し、年々同種に新法活字の二月
部、録載し、これ

花と名あり、家名の洋装も本中端、早大の同種に録載
又二冊と冊を録載して、その物に

右との、不用の用と録載し、字を録載し、数冊二冊と冊を録
部、録載し、市場に、其の物に、此の物に、下は、其の物に、
限り、今、其の物に、其の物に、其の物に、其の物に、
ら、即ち、五百圓の、其の物に、其の物に、其の物に、
ハ、其の物に、其の物に、其の物に、其の物に、

中央公論社、余の、其の物に、其の物に、其の物に、其の物に、
物と、其の物に、其の物に、其の物に、其の物に、

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

標原製

This is a blank ledger page with 12 vertical columns. The columns are separated by thin blue lines. A thicker blue border surrounds the entire grid. On the left edge, there is a small blue triangular mark pointing inward.

This is a blank ledger page with 12 vertical columns, identical in layout to the left page. It features a blue border and a small blue triangular mark on the right edge pointing inward.

東京製

え、^{（伝印）}別々、^{（伝印）}雲のさきを^{（伝印）}訪ひ、終に^{（伝印）}時支那の^{（伝印）}教育の^{（伝印）}事作
張之洞と^{（伝印）}今も^{（伝印）}支那の^{（伝印）}生を^{（伝印）}印し^{（伝印）}るの
早稲田の^{（伝印）}州と^{（伝印）}開く^{（伝印）}の^{（伝印）}協定を^{（伝印）}遂げ、^{（伝印）}張の^{（伝印）}賛同を得て^{（伝印）}取り敢
へず、^{（伝印）}二十名の^{（伝印）}日本^{（伝印）}教育^{（伝印）}を^{（伝印）}支那^{（伝印）}に^{（伝印）}招致^{（伝印）}する^{（伝印）}の^{（伝印）}約^{（伝印）}が^{（伝印）}成^{（伝印）}り^{（伝印）}の^{（伝印）}か^{（伝印）}あ^{（伝印）}り、
君の^{（伝印）}北^{（伝印）}行^{（伝印）}初^{（伝印）}に^{（伝印）}日^{（伝印）}清^{（伝印）}の^{（伝印）}後^{（伝印）}友^{（伝印）}や^{（伝印）}情^{（伝印）}誼^{（伝印）}の^{（伝印）}人^{（伝印）}の^{（伝印）}款^{（伝印）}待^{（伝印）}を受^{（伝印）}け
け^{（伝印）}扱^{（伝印）}待^{（伝印）}や^{（伝印）}慰^{（伝印）}安^{（伝印）}を^{（伝印）}蒙^{（伝印）}り、^{（伝印）}有^{（伝印）}り^{（伝印）}作^{（伝印）}り、^{（伝印）}少^{（伝印）}く^{（伝印）}は^{（伝印）}模^{（伝印）}倣^{（伝印）}の^{（伝印）}基^{（伝印）}礎^{（伝印）}と^{（伝印）}見^{（伝印）}え
る^{（伝印）}に^{（伝印）}、^{（伝印）}北^{（伝印）}清^{（伝印）}の^{（伝印）}さ^{（伝印）}え^{（伝印）}り^{（伝印）}や^{（伝印）}北^{（伝印）}清^{（伝印）}の^{（伝印）}人^{（伝印）}の^{（伝印）}東^{（伝印）}道^{（伝印）}に^{（伝印）}親^{（伝印）}光^{（伝印）}の^{（伝印）}便^{（伝印）}を得^{（伝印）}、^{（伝印）}且
つ^{（伝印）}往^{（伝印）}日^{（伝印）}より^{（伝印）}日^{（伝印）}清^{（伝印）}の^{（伝印）}書^{（伝印）}情^{（伝印）}又^{（伝印）}通^{（伝印）}曉^{（伝印）}する^{（伝印）}を^{（伝印）}得^{（伝印）}た^{（伝印）}の^{（伝印）}で、^{（伝印）}長^{（伝印）}自^{（伝印）}身
に^{（伝印）}成^{（伝印）}る^{（伝印）}を^{（伝印）}多^{（伝印）}く^{（伝印）}と^{（伝印）}消^{（伝印）}息^{（伝印）}の^{（伝印）}最^{（伝印）}後^{（伝印）}に^{（伝印）}成^{（伝印）}り^{（伝印）}て^{（伝印）}は^{（伝印）}く^{（伝印）}る^{（伝印）}、^{（伝印）}君^{（伝印）}の^{（伝印）}情^{（伝印）}意^{（伝印）}
は^{（伝印）}我^{（伝印）}が^{（伝印）}い^{（伝印）}ふ^{（伝印）}に^{（伝印）}も^{（伝印）}早^{（伝印）}大^{（伝印）}に^{（伝印）}日^{（伝印）}清^{（伝印）}の^{（伝印）}留^{（伝印）}学^{（伝印）}生^{（伝印）}部^{（伝印）}が^{（伝印）}特^{（伝印）}設^{（伝印）}さ^{（伝印）}る^{（伝印）}に
な^{（伝印）}り、^{（伝印）}三^{（伝印）}四^{（伝印）}十^{（伝印）}の^{（伝印）}支^{（伝印）}那^{（伝印）}の^{（伝印）}後^{（伝印）}が^{（伝印）}鶴^{（伝印）}巻^{（伝印）}の^{（伝印）}如^{（伝印）}き^{（伝印）}に^{（伝印）}満^{（伝印）}ち^{（伝印）}た^{（伝印）}の^{（伝印）}に^{（伝印）}、^{（伝印）}表^{（伝印）}の^{（伝印）}此^{（伝印）}旅
行^{（伝印）}の^{（伝印）}佳^{（伝印）}果^{（伝印）}と^{（伝印）}あ^{（伝印）}る^{（伝印）}に^{（伝印）}、^{（伝印）}此^{（伝印）}を^{（伝印）}思^{（伝印）}ふ^{（伝印）}に^{（伝印）}、^{（伝印）}此^{（伝印）}の^{（伝印）}旅^{（伝印）}行^{（伝印）}は^{（伝印）}君^{（伝印）}一^{（伝印）}身^{（伝印）}の^{（伝印）}化^{（伝印）}念

標原製

す^{（伝印）}べき^{（伝印）}事^{（伝印）}作^{（伝印）}り^{（伝印）}あ^{（伝印）}る^{（伝印）}に^{（伝印）}も^{（伝印）}早^{（伝印）}大^{（伝印）}の^{（伝印）}授^{（伝印）}業^{（伝印）}に^{（伝印）}十^{（伝印）}重^{（伝印）}に^{（伝印）}家^{（伝印）}を
部^{（伝印）}人^{（伝印）}を^{（伝印）}よ^{（伝印）}ら^{（伝印）}ぶ^{（伝印）}き^{（伝印）}大^{（伝印）}事^{（伝印）}件^{（伝印）}と^{（伝印）}あ^{（伝印）}る^{（伝印）}に^{（伝印）}、^{（伝印）}自^{（伝印）}分^{（伝印）}が^{（伝印）}最^{（伝印）}初^{（伝印）}に^{（伝印）}来^{（伝印）}
度^{（伝印）}に^{（伝印）}此^{（伝印）}の^{（伝印）}消^{（伝印）}息^{（伝印）}を^{（伝印）}示^{（伝印）}す^{（伝印）}に^{（伝印）}、^{（伝印）}家^{（伝印）}庭^{（伝印）}の^{（伝印）}内^{（伝印）}事^{（伝印）}に^{（伝印）}関^{（伝印）}与^{（伝印）}さ^{（伝印）}る^{（伝印）}
こと^{（伝印）}も^{（伝印）}断^{（伝印）}り^{（伝印）}、^{（伝印）}自^{（伝印）}分^{（伝印）}の^{（伝印）}思^{（伝印）}念^{（伝印）}を^{（伝印）}外^{（伝印）}に^{（伝印）}示^{（伝印）}す^{（伝印）}こと^{（伝印）}も^{（伝印）}あ^{（伝印）}ら^{（伝印）}ず、
外^{（伝印）}に^{（伝印）}、^{（伝印）}堂^{（伝印）}々^{（伝印）}に^{（伝印）}行^{（伝印）}文^{（伝印）}を^{（伝印）}、^{（伝印）}公^{（伝印）}私^{（伝印）}と^{（伝印）}あ^{（伝印）}ら^{（伝印）}ず^{（伝印）}の^{（伝印）}事^{（伝印）}は^{（伝印）}曲^{（伝印）}を^{（伝印）}奏^{（伝印）}さ^{（伝印）}す^{（伝印）}
に^{（伝印）}あ^{（伝印）}ら^{（伝印）}ず、^{（伝印）}平^{（伝印）}生^{（伝印）}自^{（伝印）}ら^{（伝印）}業^{（伝印）}無^{（伝印）}性^{（伝印）}と^{（伝印）}自^{（伝印）}白^{（伝印）}す^{（伝印）}に^{（伝印）}、^{（伝印）}君^{（伝印）}が^{（伝印）}よ^{（伝印）}く
も^{（伝印）}切^{（伝印）}に^{（伝印）}中^{（伝印）}断^{（伝印）}す^{（伝印）}に^{（伝印）}、^{（伝印）}細^{（伝印）}か^{（伝印）}ら^{（伝印）}ず^{（伝印）}の^{（伝印）}事^{（伝印）}は^{（伝印）}一^{（伝印）}筋^{（伝印）}と^{（伝印）}笑^{（伝印）}い^{（伝印）}た^{（伝印）}に^{（伝印）}あ^{（伝印）}ら^{（伝印）}ず、
一^{（伝印）}向^{（伝印）}君^{（伝印）}が^{（伝印）}一^{（伝印）}次^{（伝印）}に^{（伝印）}急^{（伝印）}に^{（伝印）}表^{（伝印）}を^{（伝印）}示^{（伝印）}す^{（伝印）}に^{（伝印）}、^{（伝印）}偶^{（伝印）}然^{（伝印）}と^{（伝印）}い^{（伝印）}ふ^{（伝印）}に^{（伝印）}、^{（伝印）}君^{（伝印）}の^{（伝印）}誠^{（伝印）}意^{（伝印）}を^{（伝印）}敬^{（伝印）}服^{（伝印）}し^{（伝印）}、^{（伝印）}偶^{（伝印）}々^{（伝印）}に^{（伝印）}書^{（伝印）}の^{（伝印）}旨^{（伝印）}を^{（伝印）}い^{（伝印）}ふ^{（伝印）}こと^{（伝印）}も
命^{（伝印）}に^{（伝印）}あ^{（伝印）}ら^{（伝印）}ず、^{（伝印）}所^{（伝印）}感^{（伝印）}を^{（伝印）}留^{（伝印）}り^{（伝印）}て^{（伝印）}、^{（伝印）}其^{（伝印）}旨^{（伝印）}を^{（伝印）}い^{（伝印）}ふ^{（伝印）}こと^{（伝印）}も

小道具入三軍弓 此の香障、香合、茶室、根付、昔珍、青、赤、白、
骨、甚、是、万、位、を、取、也、 三、軍、弓、也、

小道具入 鉄、又、最、一、双、 此、内、多、く、陶、器、を、納、也、
カ、ラ、ス、装、飾、の、桐、 種、々、形、式、の、件、係、三、十、四、個、を、取、也、 桐、也、

唐、墨、 由、草、の、花、を、取、也、 乾、隆、御、製、の、墨、也、
名、書、納、也、

ハ、ン、ド、ー、ル、 九、廻、理、石、像、付、木、和、生、也、

川、合、室、法、師、の、花、瓶、 銅、製、海、部、大、花、瓶、

仕、入、品、二、個、入、入、し、も、小、品、 昨、年、漢、陽、の、海、部、の、物、も、の、全、部、

松、雪、房、の、字、樣、風、爐、 木、米、木、板、

樂、器、の、山、吹、尺、五、尺、板、額、一、枚、 真、珠、掛、板、

標、原、製

右、丈、為、物、ト、ラ、ウ、ク、以、端、朝、を、送、り、出、す、多、く、の、意、玩、の、も、ろ、ろ、と、は、惜、
痛、中、の、と、互、体、自、在、を、示、す、一、と、出、し、七、拾、五、拾、六、拾、七、拾、八、拾、九、拾、十、
に、四、五、取、目、入、け、た、り、も、例、一、の、急、卒、の、尺、集、命、令、を、示、し、敵、お、り、情、を、
盡、す、と、違、々、々、又、卒、征、路、上、の、た、り、か、如、く、或、ん、じ、の、四、十、説、の、も、
餘、裕、も、も、強、く、惜、し、き、感、を、極、く、し、も、と、り、也、 三、月、十、九、日、記

○今、朝、の、戦、役、に、吾、家、も、出、征、し、な、り、一、人、も、も、死、傷、中、に、出、征、
ある、ま、は、回、り、合、で、の、止、り、得、な、ら、ず、何、と、も、も、と、氣、の、満、ち、た、道、を、
人、に、托、し、て、
世、劍、の、銀、を、も、り、度、五、元、八、月、吉、日、龍、宮、を、臨、目、後、神、殿、鐵、器、
右、部、高、市、島、正、克、需、と、り、し、作、事、の、何、人、も、と、評、小、口、と、り、し、
青、生、之、の、為、の、作、り、た、り、し、と、別、紙、を、も、り、た、り、し、
柄、無、し、

三、月、十、九、日、記

山陽元鳳之思... 漢文天賦の題意を伴ふ
このあり、其文のうらみ

No.
元鳳何如七又書至何其懇
懇也僕聞若說可以息慰矣
比僕文於物翁初作曰道之
元鳳非臂肩者類然是疾之
美耳勛之晚成則藥石哉亦
百年而名章徹者元鳳欲與

No.
襄談之襄固欲與元鳳談之也襄
佔得蓬蒿間仰天大息或曰猶勝
龜即之烽臺矣抑元鳳如禮樂敦
詩書腹蓄十萬水聲而與成平伍
邪天生元鳳果何意乎元鳳第飲
望萬山絕頂益著書亦無不可僕
則想其望之壯也安得與側望臺
上彈劍悲歌右俯玄澗左瞰太白
之星論古今邊防若否也且寄二
詩亦可以自慰乎天方寒自愛襄
白

○喜ぶ死に即ち葬儀、幹部より運動も葬儀が終つてから職務も
取次つてあれ早大同と終り主事一、小林三は定規とて死んだら
奇異であつた、臨病者な心臓麻痺卒死とて、肥後直也も無く、本
人に死病を罹るも自ら死せぬとて、入院したとの如くても
受けて間もなく死亡の報を聞き、善いなり、善いなり、此に
は自らの同部のよき、自らが同部で長年勤めて来た、自らの勤
入んた、此は三十五年七勤続とて、自らの勤め、自らの勤め
時代も自公を嘗て扶け、殊に自公が御座るの合共を長く勤めて、御座る
在り、御座る御座る、他人が常れ今の世話をし、自公の御座る御座る
雨倒も、御座る御座る、他人が御座る御座る、御座る御座る、御座る御座る
んして死すのと思ふ、他人の御座る御座る、御座る御座る、御座る御座る
御座る御座る、他人の御座る御座る、御座る御座る、御座る御座る、御座る御座る

藤原製

味けろくれば心が、正極仕事好まむ勤勉の人にあつた情しき事也
余の身後を托せんとも人皆早く没す、歎ふべき也

の余の早大の幹す、抑す、在勤中、校長致授専ら、と書ける書簡は多く
懐念して二三冊の大いふに在り、其合者の多くは既、更寫し上り、其
人の筆跡、幾んど見る、校又傳り、そのありし、こと、同く、其、是れ、は、
昔の人の片氣を憶ふより、す、か、と、わ、る、ん、と、家、を、な、ま、る、し、用、を、
ことと、ま、ま、し、し、市、場、を、出、さん、も、故、人、の、礼、を、缺、く、斯、く、よ、の、同、く、後、
よ、ま、厚、く、永、久、な、ま、す、と、可、と、う、乃、と、ん、と、能、く、其、の、終、り、と、ま、
日、山、陽、の、畫、梅、是、の、氣、を、お、う、ま、う、是、一、匣、を、傳、へ、よ、の、あり、又、
の、か、し、又、新、粉、屋、の、五、條、二、幅、向、い、く、是、運、其、の、傳、せ、候、了、

三月四

藤原製

想見園城烈灼紅 要津戰岸記中心切 太平今日日

梅花海 半醉千金玉雪中

石井君要余於伏水城也 若梅醉裏談唐文

長年同事 賦此相憶

壬辰二月二十七日也 秋古表

No. 絶句 絶句 絶句 仰天見寸碧 大濕落頭 飛絲
人飲白 願 西

萬葉山龍春月 花窓近 不雲還不雪 滿眼
只模糊 和

○或る人早稲の事同を説き始む。自合が彼長じあつたを、其の任を
法を問われ、自合の之を以てん。自合の仰りて、此物と味人の早
稲のり、彼をさうに頃、心式を同し彼の考証は、同を以て合敷法
を、さうにさうに、唯此一回の書物に考証する、こゝに熱心がある、大
抵毎朝朝から地を掘り、琉球国に於て、さうを考へた、多くの城へ書
卷、十日の考証に取つた。他の考証も見せ、り且つ、海、岸、の、丸
長、さ、を、考、へ、た、が、自、合、の、考、証、は、あ、つ、た、の、和、漢、の、古、本、の、考、証、
あつた。その口を言ふ、何故無量の考証もあつた、同を考へて
考へた、その口を言ふ、其の非難、身を傾け、一概に古本考証、
此、ある時木村、竹、山、の、漢、方、醫、の、日、花、を、自、合、と、考、証、し、た、時、も、
部、二、回、考、証、二、百、回、考、証、し、た、と、考、証、し、た、珠、環、が、市、場、に、他、の、人、と、考、証、し、た、
の、禮、儀、数、典、を、百、回、考、証、し、た、の、を、仰、り、買、つ、て、琉、球、の、考、証、者、の、

棟原

果をゆかせることもあつた。珠環をまゝの古本を彼、考へた自合の彼を
珠環を考へた、も、偶、れ、ひ、さ、う、に、考、証、し、た、同、を、考、証、し、た、價、の、拂、出、は、種、々、南、洲、の、考、
り、さ、う、に、故、法、を、行、は、さ、つ、た、と、考、証、し、た、。其、は、自、合、が、和、漢、の、古、本、考、証、し、た、
没、頭、の、考、証、の、價、が、高、く、持、来、考、証、し、た、價、が、日、即、騰、貴、し、た、と、考、証、
し、た、。自、合、の、考、証、し、た、古、本、の、考、証、し、た、と、考、証、し、た、。傾、向、を、考、証、し、た、と、考、証、
つた。洋書も、自合の彼の考証、考へた、其、は、一、考、証、し、た、と、考、証、し、た、
わ、く、古、本、を、今、集、め、考、証、し、た、と、考、証、し、た、。自、合、の、考、証、し、た、故、を、考、証、
た、が、果、して、珠、環、の、考、証、し、た、見、込、は、違、つ、た、と、考、証、し、た、。其、の、早、稲、の、同、を、考、証、
た、い、さ、う、に、考、証、し、た、と、考、証、し、た、。考、証、し、た、と、考、証、し、た、。自、合、の、考、証、し、た、
回、書、考、証、し、た、と、考、証、し、た、。起、過、し、た、と、考、証、し、た、。考、証、し、た、と、考、証、し、た、
考、証、し、た、と、考、証、し、た、。考、証、し、た、と、考、証、し、た、。考、証、し、た、と、考、証、し、た、
出、来、考、証、し、た、と、考、証、し、た、。考、証、し、た、と、考、証、し、た、。考、証、し、た、と、考、証、し、た、

全部を五百圓とするが、今更なるものも在り、そのうち、官の財金を用ひて
その餘地は無つたとしても、其の自分のやつておられた國を刊行するの在り、金をと取らざる
を仁拂ひつたこともあつた、自分の文章から、その點を得た多くの國を、
か、思ひ出すので、京都の大丸から、其の爲の大部分を甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、
ひ、其の内、支那の各地の地理誌が、或人と、全部揃つたのは、
田中光顯伯から、國史館の皇統の札記の義疏や、二冊の天竺の命や、日本最古
の古文書を得たこと、そのとき、何れの國史館も、其の正敵するものがある
今でも、彼の著りとなつてゐる。こんな事、二十二年、
のなると、信じて、そのを作つて、法家と、焼つた、
一四十五、
その、
めと、
めと、
めと、

長を、
自、
を、
自、
此、
の、
た、
法、
出、
最、
ら、

○偶に花よりしる原稿の紙と複製した「七一白紙」と「江湖」を
 湯て、その紙質と色味を鑑み、此の紙より複製した。其
 写本家より紙の厚さが、大正十五年複製を冷き一冊としてある。七一
 白紙は岸田吟香も無った。然るに外人が「エニリド」の主宰としてある。其
 江湖は多分福地源一の編輯であった。其の意を四年の刊行
 の紙に友人の「エニリド」は「五米利加」の友人の「船」も東報に人
 の「五米利加」の紙も未だ知らず。其の意を「エニリド」の紙も未だ知らず。其の意を
 行する出さぬ下は、これを施した。其の意を「エニリド」の紙も未だ知らず。其の意を
 高きもせり出さぬ。其の意を「エニリド」の紙も未だ知らず。其の意を
 人びらに、此の紙は半紙二つ折りの今の紙の体裁で、日本人の執
 筆、此の紙は「檣紙」の署名、岸田の署名、Assonとある。其の意を
 此の紙は、未だ知らず。其の意を「エニリド」の紙も未だ知らず。其の意を

藤原

ころ、エニリドの紙質と色味を鑑み、此の紙より複製した。其
 写本家より紙の厚さが、大正十五年複製を冷き一冊としてある。七一
 白紙は岸田吟香も無った。然るに外人が「エニリド」の主宰としてある。其
 江湖は多分福地源一の編輯であった。其の意を四年の刊行
 の紙に友人の「エニリド」は「五米利加」の友人の「船」も東報に人
 の「五米利加」の紙も未だ知らず。其の意を「エニリド」の紙も未だ知らず。其の意を
 行する出さぬ下は、これを施した。其の意を「エニリド」の紙も未だ知らず。其の意を
 高きもせり出さぬ。其の意を「エニリド」の紙も未だ知らず。其の意を
 人びらに、此の紙は半紙二つ折りの今の紙の体裁で、日本人の執
 筆、此の紙は「檣紙」の署名、岸田の署名、Assonとある。其の意を
 此の紙は、未だ知らず。其の意を「エニリド」の紙も未だ知らず。其の意を

とをみるべきこと

○近刊の雅福、す志路に其郷里の盛吹と多くぬめ
あり、野泊とよまゝ真年の味あり、吾んは之を稱
して切時と思ふ

おま来たてかん、お踊衣持りの(ぬ)所只の流んか買て
くりせん

おま来たてかん、お下け帯持りぬ、(おと、舞臺)の禪
でも借つ(礼)て下げぬ

おま来たてかん、お真あるお衣持りぬ、(おと)と踊るも
真つ禪

おま来たてかん、おお子の皮ぞせ(お新焼)ぬ、あまう盛りつけんと
鼻日てん、お焼いた

おま来たてかん、おお子出て踊ん、猫も杓子も皆踊ぬ

おま来たてかん、おお子、天下御方の盛あそび

おま来たてかん、おお子、お中候、おあそび、お吹きあそび

おま来たてかん、おお子、おお焼けぬ、お焼けぬ、おお焼けぬ

おま

おま来たてかん、おお子、おお焼けぬ、おお焼けぬ、おお焼けぬ

おま来たてかん、おお子、おお焼けぬ、おお焼けぬ、おお焼けぬ

おま来たてかん、おお子、おお焼けぬ、おお焼けぬ、おお焼けぬ

おま来たてかん、おお子、おお焼けぬ、おお焼けぬ、おお焼けぬ

おま来たてかん、おお子、おお焼けぬ、おお焼けぬ、おお焼けぬ

酒

酒は米のあそび、おお子のあそび、おお子のあそび、おお子のあそび

世間えす

鐘はゴント響く日は中もあゝ濱の鹽を煮きり今更の
世間海は豆府の海を、ちやを四り何やわらわで
秋田土産に下駄買つても買つた、とふ、い俺んをばあ
まにけれ

八十八子折れんかゝ、徳は松きんるゝはとぬ

ふいねてやゝか米一升買はふか、思ひが米買へば気が

ふいね

此等の俗儀の内、自今か印時名深のものもあるが、俗物を
これ保留は自今か知らず、ちの心か、せん其まこと記しおれ

の國法寺の御寶とまつてあるもの玉虫の針子か、あゝとよ
ま虫のえりのある虫の壳を字々の集り、は飾の材料とせよ、
の殺傷をよむ、何れも、何れも、何れも、何れも、何れも、何れも、

A ledger page with a blue border and 12 vertical columns. The columns are of varying widths, with the first column on the left being the narrowest and the remaining columns being of similar, slightly wider widths. The page is otherwise blank.

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

1888



廣瀬旭莊 (上)

—江戸居住時代—

杉原夷山

東國詩人の冠

廣瀬旭莊は才藻富贍、最も詩を善くし、兄淡窓と俱に名聲天下に雷轟した人である。清の俞曲園が『東瀛詩選』を著すや、淡窓を評して、子基、蓋し隱居教授するもの。篠崎弼の序にいふ。近世善く後進を教育するもの、山陽に於ては則ち茶山菅翁を稱し、九州に於ては則ち淡窓廣瀬君を稱すと。以て其人を知るべし。晩年處士を以て旌命の擧を蒙る。述懐の詩六首あり。蓋し亦異數なり。詩皆其門人の刻する所。平淡の中、自ら精彩あり。集中論詩五古一首を讀みて、其の此道に於て三たび脈を折るを知るべし。

淡窓の詩に就いては、平淡の中、自ら精彩ありといふに過ぎない。けれども旭莊を評しては、吉甫、才氣横溢、變幻百出、長篇大作、五花八陣の奇を極め、而して片語單詞、又雋永味ふべし。鐵研學人齋藤謙は、其構思泉の湧くが如く、潮の渦が若く、口吻を發し筆端に上るに及びては、馬の坡

す。而して濃は尤も甚し。此理予の詩に於てか之を見る。但だ淡に過ぎて味なきは、猶ほ濃に過ぐるにまさりて厭ふべきなり。能く此意を解するもの、以て吾兄弟の詩品を窺ふべし。王孟章柳を宗とする淡窓の詩を評し得て好し。高野豆腐と鰻と、自らはれ兄弟二家の公案である。

濱町の肅舎

旭莊が江戸在住は前後兩度あつて、前は天保八年二月に來た。時に年三十一。舊識なる羽倉簡堂の家に寄寓し、當代の學士文人に交つた。先づ大學頭林述齋に謁し、子の禮字、藕濱及び古賀侗庵、岡本豊洲、成島東岳、安積良齋等と相唱和し、又た佐藤一齋、松崎謙堂、齋藤拙堂を歴訪した。其他相逢ふ名士には館柳灣、立原翠軒、梁川星巖、鹽田隨齋、大槻磐溪、市河米庵等あり。旭莊之と馳騁して才名日に揚がつた。

旭莊江戸に在ること八十日許りにして泉州堺に歸り、次ぎて門戸を大阪に張つた。徒を集めて教授すること五年。天保十四年の五月再び江戸に來た。是より先き關老水野越州政を執り、簡堂は厚く其信任する所となつてゐたので、旭莊に東して、越州足下の才を聞いて聘用に意あると聞いてゐる。越州は不世出の英傑である。足下命に應ずるがよからうと勧めたことがある。それで旭莊は功名或は手に唾して成らむと、勇躍して途に上つたのである。

江戸に着いて直ちに簡堂を訪ねた。けれども簡堂は官命を以て大阪に出發する際とて、之と細談することが出来なかつた。のみならず大

に注ぐが若く、雲の空に飄りて而して風の葉を卷くが若し。多しと雖も濫ならず。長しと雖も冗ならずと稱せり。洵に吉甫の詩を知る者なり。吉甫塵務を擺脫し、仕途に入らず。親しむ所は則ち墨客騷人。好む所は則ち江山風月。宜なり其東國詩人の冠たること。詩の美收むるに勝へず。故に選に入る者甚だ多し。

力を極めて賞揚した。曲園は能く詩を知るものでないが、彼士の大儒である。それが旭莊を以て東國詩人の冠としたので、旭莊は忽ち九鼎大呂よりも重きを致した。五弓雪窓が旭莊に謁した時、旭莊自ら兄弟の詩品を論じたことがあ

る。雪窓之を記して曰く、旭莊、余に謂つて曰く、家兄淡窓の詩、譬へば宰人の調理に巧みなる者、高野豆腐を烹るに、佳醬霜糖を以てし、甘酸節適、恰も飲客の好下物と爲るが如し。其味淡にして雋なり。予が詩譬へば鰻の如し。若し割烹度を失すれば、鄙俚厭ふべし。通人豪客の一匕に上ぼさんと欲すとも鳥んぞ得べけんや。凡そ濃淡並に度なかるべから

病に罹つて百死に一生を得、頗る去留に迷つたが、醫家坪井誠軒、伊東玄朴の勧めに従ひ、遂に意を決して江戸に在住することとし、是の歲十二月末に、廣居を濱町に買つた。代金七十九兩、地代一年十兩である。醫家の鹽田松園の隣で、其塾を名づけて肅舎と曰ふ。

筒井鑾溪

旭莊の風采は、一個の田舎翁であつた。其友篠崎小竹、菊池溪琴等始めて相見た時、皆曰く「吾輩平生、長身玉立、清俊の氣、眉宇にあはるゝ人と想つてゐたのだ。豈に料らむや、魁梧にして而かも矮く、且つ近眼で村氣拘すべしとは」と。

旭莊は極度の短視で、常に水牛縁の大眼鏡をはなさず、貴人に接して已むを得ず眼鏡を去れば、殆んど見分けが付かない。弘化二年十月、始めて筒井鑾溪に謁した。鑾溪名は政憲、字は子恒、佐治右衛門と稱し、幕府に仕へて書院番士より南町奉行に進み、伊賀守に任ぜられた英傑である。學問頗る宏博で、最も經籍に精しく、又藏書家であつた。旭莊の謁せる時は、鑾溪は七十二歳で、鑾鑾たること壯者の如くであつた。旭莊は鑾溪にむかつて、某短視で眼鏡がなければ、公の風貌明かにわかりませぬといへば、速に眼鏡をかけ給へ、七十の皺づら何の見所があらうぞと打笑ふ。旭莊は「容貌清癯、辭氣溫雅にして精神駿發」と評してゐる。

ついでに曰ふ、旭莊は後妻木村氏を娶るに當つて、其見合ひの時に顔の美醜が能く分らない。娶つてから「これ程とは思はなかつたが、月下氷人も随分ひどいのを授けたものだ」と呷つた。

菊池五山を痛罵す

旭莊嘗て羽倉簡堂の座上に一老人を見、姓名を通ずれば菊池五山である。五山時に年七十八であつた。けれどもなほ五六十の人のやうである。旭莊は少時より其詩名を聞いてゐるので、今も猶ほ健全此の如しとは思はなかつたので大に驚いた。乃ち辭を卑うして詩法を問へば、五山答へて迂老は已に老したり。而かも詩を賣つて活を爲すといふのは、眞に慚愧の至りでござるが、足下は當代の韓蘇、迂老から高教を請はなければなりません。殊に令兄淡窓先生は、迂老の欽仰する所、其詩鈔一本を購ひたく存するといふので、旭莊は然らばお笑ひ草までに早速獻呈致しまするとて、翌日手簡に添へて之を贈つた。されど五山は之を受けて返事だにしない。旭莊怒つて復た五山に面するを欲せず。五山の詩織巧俗佻、能く年少を悦ばしむるけれど大方に取られず。近時江戸詩風の壞れたのは、此人の爲めであると罵つた。

入塾生の詳報

拙者が藏する旭莊の書牘十數通の中に、弘化三年五月、門人西島青浦に與へたものがある。

去十二月、當年二月の御狀致拜見候。梅雨之節彌御壯健奉賀候。扱家内不幸に付御弔書被下辱奉存候。當時は大阪より從來之生も無之無人と云ひ旁大に困り入候。塾生は去年之者大抵違候。人名如左。

- 宇田川 眞齋
- 坪井 信良
- 坪井 信貞
- 伊東 虎吉
- 伊東 玄敬

- 西川 元正
- 古川 太郎
- 釋 永覺
- 村松 玄龍
- 村松 太郎
- 小國 孝藏
- 森本 叔藏
- 堀内 忠迪
- 中野 宗庵

右丈入塾生也。其他外來五六人あり。此節は悪生なし。皆出精候。玄益は大困窮、今も布子を衣、當方にも不實だら／＼也。安五郎は歸家迎妻候。入門生は追々御座候へ共、小生も一人にては不自由にて困り候間、様子により九十月頃大坂へ歸り可申敷。足下も其時は彼方へ御出可相成候。又様子次第日田へ下り候間、其時は下ノ關に兩三日滞留可致、秀平子方へ御尋可申と相含居候。若大坂に参り候はゞ、爲御知可申候。小生より不申上候はゞ、他人より小生江戸に居り不申と申候とも皆虚言也。矢張江戸へ向御消息可被下候。委細は秀平子方迄申上候方、御承知可被下候。頓首。

五月十日 廣瀬 謙吉
西島孫吉様

尙々御親父様へ宜被仰上可被下候已上。旭莊江戸に來たつてより、運命非にして百事齟齬し、逸足を展ぶることが出来ない。妻の合原氏を喪ひ、又盜難に逢ふこと一再に止まらず、殊に依附する所の簡堂に讒誣するものがあつて、之をして西歸を勧めしむるに至つたので、旭莊は痛く苦悶した。後に疑ひは解けたけれど、天時未だ至らずと長大息し、江戸に住居す祖先の意に背くのであらうかと、歸志をさるゝに動いて、右に掲ぐる書牘の中にも、江戸退却の意をいつてある。秋八月其歸装を整ふるや、僕喜助が爲めに金銀衣服を盗まれ、財囊一空となつて、最早二進三進もきかなくなつた。

